

明治、大正、昭和：20世紀日本建築の時代区分の大まかな案内

関門海峡地域の歴史的建造物は、日本が新たに「近代」社会を形成するために次々と西洋文化の影響を取り入れていた、広範囲に及ぶ大転換の時代に建てられたものである。これらの建造物は、そうした変化の目に見える証である。各時代の建築の特徴は、この国の発展上のアイデンティティを反映しており、いくつかの重要なデザイン要素を用いて、これらの大まかな建築時代を区別することが可能である。

地域の建築への西洋の影響は、1853年にアメリカの特使マシュー・C・ペリー提督（1794-1858）が艦隊を浦賀湾（東京近郊）に来航させ、200年以上にわたる日本の鎖国に終止符を打ったことから始まった。1858年、フランスやイギリスをはじめとする諸外国が日本の港に入港できるようになると、外国の思想や技術が国内に流入した。擬洋風建築（ぎようふうけんちく）として知られる様式が、日本の大工たちによって開発された。彼らは伝統的な工法を駆使して、石造りや塔などの西洋建築の外観を創造的に再現した。

明治建築（1868～1912年）

明治時代には、日本政府が海外から建築家や技術者を招き、若者を海外に留学させたことで、擬洋風建築は拡大した。最も影響力のあった外国人専門家の一人は、1877年に東京の帝国大学工部大学校の教授であったイギリス人建築家ジョサイア・コンドル（1852-1920）である。彼の教え子の多くは後に大きな成功を収めた。辰野金吾（1854-1919）は関門海峡地域のいくつかの建物（現在は破壊されている）を設計し、妻木頼黄（1859-1916）は門司税関の設計を担当した。

この時代、赤煉瓦は西洋から広く輸入され、その特徴的な素材は明治期の象徴となった。旧英国領事館は、外国人建築家が赤煉瓦を使い、一貫して西洋の美学に従って設計した建物の例である。このような建物は、官公庁、企業、教育施設であることが多いが、民間の建築物（店舗や倉庫など）もこの様式で建てられている。赤煉瓦の存在は、1800年代後半から1900年代前半の建築であることをはっきりと示している。

大正建築（1912～1926年）

大正時代の建築家たちは西洋の設計様式に親しんでいたため、この時代の建築には伝統的な要素と外国の要素が融合していることが多い。その一例が1915年に建てられた秋田商会ビルで、1階の洋風のオフィスと、日本の伝統的な大工造りの上層の住居階が組み込まれている。1900年代の最初の数十年間から、総煉瓦造りの設計は徐々に鉄骨造や鉄筋コンクリート造に取って代わられた。この変化は、1923年の関東大震災にて煉瓦造りの建物が地震の揺れで簡単に倒壊するということが悲惨に実証されたことで加速した。

同時に、大正の建築家たちは芸術的な表現を試みるようになった。1920年には、日本初の近代建築運動である「分離派」が登場した。この運動は、ドイツの建築表現主義やウィーン分離派（1897年結成）に触発されたものだった。この運動の指針は、伝統主義から脱却し、より独創的で自由なデザインへと進むことだった。この運動は1928年に消滅したが、そのメンバーは20世紀半ばまで日本の建築に影響を与えた。

昭和建築（1926年～1989年）

昭和初期は、門司郵船ビルや旧大連航路上屋に見られるように、アール・デコなどの西洋の芸術運動からの影響が特徴的である。これらの昭和初期の建築物は、精巧な装飾や豪華なモチーフを特徴としている。時が経って、この様式は、下関の関門ビルや門司区役所に見られるように、より独創的で芸術的な自由へと変化していった。

第二次世界大戦に至るまで、公共建築のデザインは伝統主義への回帰を示し、皇冠様式という建築様式が採用された。皇冠様式とは、新古典主義建築のことで、多くは赤レンガ造りで、伝統的な入母屋造りの屋根が特徴であった。第二次世界大戦中、あらゆる時代の建築物が広範囲に及ぶ爆撃で破壊され、その後の復興期には、建築家たちは、比較的早く、安価で、火災や地震に強い西洋の工法や材料（鉄筋コンクリートなど）に目を向けた。